

倉敷市 (くらしきし) 人口.475,000

岡山県の倉敷は、様々な魅力をもった街だと思う。ずいぶん昔、学生時代の最後、春の旅行で初めてこの街に出かけた。岡山駅で新幹線を降り山陽線で西へ30分、車窓に川崎医科大学の看板が目立つ。その後、左手に倉敷の家並みが見えて来た。

「美観地区」から

駅前の観光案内所で宿を予約し、その民宿にも近い「美観地区」へと徒歩で向かった。左手に倉敷川の堀が続く美観地区は、その水面に柳の木が映り、時代劇の舞台にタイムスリップしたようだ。堀にかかる石橋まで往時をしのばせる造りだった。表通りには頻りに車が往来するが、この一画だけは時間がゆっくりと流れていた。倉敷の歴史を紐とけば、吉備(きび)平野にあるこの豊かな地は、江戸時代には天領となり、幕府の経済を支えた。街の名も、周辺からの産物を集散するための蔵が並び立つ様から、倉敷と呼ばれた。そして明治維新。地元の豪商たちは新しい時代にマッチした紡績会社を興した。その中心にいたのが、ここに屋敷を構える大原家だった。「倉敷紡績(現クラボウ)」は、その後明治大正昭和を通じ、日本の花形の輸出企業として、この地を拠点に発展して行った。



夏の倉敷アイビスクエア 中庭

最初の工場は、倉敷川から一步入った所、江戸時代に代官屋敷があった場所に、レンガ造りで建てられた。そこが現在、アイビスクエアとして、観光と宿泊のしゃれた施設に変わっている。入り口には石造りの井戸の跡。それに続いて工場跡のレンガ壁が連なり、落ち着いた雰囲気醸(かも)し出す。さらに進むと、工場の真ん中の屋根をぼっかり抜く形で、広々とした明るい空間が現れた。周囲のレンガ壁に蔭(つた)がはい、文字通りアイビスの広場となっていた。まだリフォームなる言葉が日本に定着する前の1970年代、使われなくなった工場の用途を転換する形で再生させた貴重な実例と言える。建築家は、クラボウから派生したクラレにいたこともある浦辺鎮太郎(しずたろう)氏だった。

大原美術館

さて翌朝、美観地区の入り口近く伝統的な街並みと対照的な大原美術館へと入る。この街の観光の目玉だ。ギリシャ神殿を模した石の円柱が正面を支える本館は、高い天井をもつ2階建てで、この美術館の主要な作品が収まっていた。ギリシャ出身で、スペインで名を成したエル＝グレコの『受胎告知』。点描で描いたセガントーニの『アルプスの真昼』。生まれ故郷ノルマンディーの風景を描いたミレーの『グレヴィルの断崖』など、豪華な近代絵画の作品が収まっていた。この地方都市になぜこれほどの？と問う人がいるかもしれない。

これもまた、倉敷紡績とつながる。大原家の二代目は孫三郎(まごさぶろう)で、彼こそ今日の文化都市＝倉敷の下地を造った人と言える。20世紀が始まった明治の終わり、東京での遊学から呼び戻された孫三郎は若くして紡績会社の社長を後継し、事業の発展と拡大を図って行った。その利益を投資へと向け、地元の銀行や電力会社を買収する。一方で教育や福祉、芸術や文化での地域貢献へと、惜しみなく還元した。

大原美術館 本館



孫三郎は、人材を活用するのに巧みだった。備中高梁(たかはし)出身の画学生、児島虎次郎に欧州への留学を勧め、彼に学びの機会を与えた上に、第一次大戦後の混乱する経済の中で、円貨が実力以上に高かったことを利用し、貴重な絵画の蒐集(しゅうしゅう)を依頼した。こうして美術館の初期コレクションが整う。1930(昭和5)年11月に、開館の運びとなった。

本邦初の私立美術館だったが、当時その作品の価値がわかる者は少なく、見学者ゼロの日もあったという。そんな折、満州事変を契機とするリットン調査団が、倉敷に立ち寄った。欧米出身の団員たちは、母国でも評価の高い作品が日本の地方都市に展示してあるのを見て驚いた。その後、太平洋戦争中の米軍による空爆で倉敷が目標にならなかったのは、この時の参加者の進言によると言われている。美術品が、街を救った。

美術館は本館のみでなく、脇の土蔵を利用した工芸館や背後の庭園「新溪園」の奥に現代美術家の分館を備えていた。土蔵と言っても、河合寛次郎、富本憲吉、浜田庄司と言った陶芸界の大御所の作品が、分館にも画家の安井曾太郎、梅原龍三郎などの作品が展示されている。日本史の教科書にも載る岸田劉生の『童女舞姿』の住み処(か)もこの館だ。

倉敷中央病院

午後は、一旦この観光の中心から離れ、数百m北東の倉敷中央病院を訪ねた。孫三郎が率いる紡績会社は、その規模を拡大する中、多くの従業員を抱えることになった。その勤労者のための夜間補習学校は、1902(明治35)年に開設された。次に手を付けたのが市民にも開かれた総合病院の開設である。23(大正12)年、数年間の検討の末、この地に倉敷中央病院を開院した。孫三郎は病院建設にあたり、「治療本位(真に患者のために)」「病院臭くない明るい病院」「東洋一の理想的な病院」という三理念を打ち出し、それを実現させた。

半世紀の時が立ち、灰色の壁面にひびも見られる建物は、創立以来の赤瓦が屋根を覆いモダンな雰囲気を随所に残していた。中でもぜひ見たかったのが、外来患者用・入院患者用と二つ備わった温室だった。病棟の脇に八角形の温室があった。熱帯植物が生い茂る室内はほんのり温かく、寒さの残る3月には快適だった。外来用は、身体の痛みや心の悩みで沈む気分を慰めるため、また入院患者用は、退屈な時をまぎらわすため、孫三郎が虎次郎とともに設計したものだ。

倉敷中央病院 新館 温室と噴水



この訪問時、すでに始まっていたが、病院の本格的な改築は、1980(昭和55)年に中央棟の竣工を見、高度な医療にも対応できる現代的な施設へと装いを新たにされた。設計は先の浦辺氏による。新病棟も孫三郎の意思を継ぎ、「病院臭くない明るい病院」を目指して造られたと言う。温室はもとより、観賞魚を眺める空間や、

流水壁をもった涼の中庭など、至る所に楽しい仕掛けを設けたそうだ。

孫三郎は若き日、心の師とあおぐ石井十次に出会った。石井は岡山市に孤児院を設け、生涯その救済に当たった。石井との交流も生涯続き、その運営を財政面から支えた。数年前に松平健(マツケン)主演の映画『石井のおとうさんありがとう』が公開された。その石井とのエピソードに事欠かない人物だ。

倉敷を再訪

二度目に訪ねたのは、教員になり夏休みに北九州と広島を訪ねた87年8月のことだ。倉敷を訪ねて思ったのは、その普通でない蒸し暑さだった。ただし今度は例のアイビスクエアのモダンな宿舎にお世話になり、エアコンが効く快適さを得た。ホテルはその構造上なのか、個別のバスがなく代わりに大浴場が備わっていた。広々とした湯につかることができた。この時は、豪華庁舎と批判されていた新市役所を訪ねてみた。伝統との調和というこれまでの路線を越え、浦辺氏が手がけた建物は、ドイツの田舎の役場を日本の田んぼの中に建てたかと思うミスマッチで、興ざめした。

2013年の正月も、広島にカキを食べに行く前に倉敷に立ち寄った。久しぶりに美術館を訪ねたが、今度は工芸館もしっかり見せてもらった。陶器の収集は孫三郎の趣味だったが、それは三代目の總一郎にも受け継がれた。總一郎は、1932(昭和7)年に東京帝大の経済学部を卒業し帰郷。倉敷絹織(後のクラレ)に入社した。孫三郎を「動」とすれば、總一郎は「静」の人と言える。学者肌で実際母校の教壇に立ったこともある。その總一郎がクラレで手がけたのがビニロンの商品化。苦勞してこれに成功すると、今度は日中友好の徴(しるし)として国交前の中国にプラント輸出された。戦争で迷惑をかけた贖罪の思いだったと言う。社会的使命を忘れない点では、父と同じだった。

總一郎が故郷の街づくりに活かそうとしたのが、クラレにいた浦辺氏だった。その浦辺氏を信頼し社内に建築研究所を設立した。倉敷紡績と言う企業だけでなく、倉敷市としての風土や伝統の中で、ふさわしいデザインを追求した。それは、新市庁舎という逸脱はあったものの、大方成功したと思う。

左が美観地区入口 右が国際ホテル



大原美術館の裏、駅前通り沿いに倉敷国際ホテルがあった。1964(昭和39)年開館のこの小さなホテルは、蔵の街にしっかりと溶け込む外観で、鈍(にび)色と漆喰(しっくい)の白色とを多用している。地味だが上質といったイメージだ。ロビーに入ると、見上げるような吹き抜けに大原美術館にも収蔵品がある版画家、棟方志功(むなかたしこう)の巨大な板絵が一面を覆(おお)っていた。「坤(こん)」という字で「宇宙」を表す、棟方らしい墨絵の作品だった。浦辺氏はこの建設で、同年の日本建築学会賞を受賞している。

日本のどんな地方都市に行っても陳腐(ちんぷ)な銀座通りに出くわす。個性のない街が多い。倉敷は違う。倉敷紡績と大原家、それにまつわる芸術家や社会奉仕家と言った人々が、明治大正昭和とつちかかって来たものが花開いた。企業の繁栄による豊かさを背景に、多様な人々が交錯した。<了>

この項、『福生つうしん』第2号から転載しました。